大学における人材育成のキーポイントについての一考察

――正課外教育の視点から――

百合野　正博

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　正課外教育の意義と重要性
Ⅲ　学生の多様化と現実とのギャップ
Ⅳ　正課外教育の分野での大学の支援
Ⅴ　アイデンティティー確立支援のための正課外教育プログラム
Ⅵ　むすびにかえて

Ⅰ　はじめに

本稿においては，大学生の人間的成長のプロセスにおける「正課外教育」の重要性に焦点を当てて論じることを目的としている。ここで，一般的な呼び名である「課外活動」ではなく「正課外教育」という用語を用いている理由について述べておかなければならない。「課外」ではなくて「正課外」，「活動」ではなくて「教育」という言葉をそれぞれ用いている理由は次のとおりである。

第一に，最近，大学側の意識においても学生側の意識においても，ともに，大学の提供する「教育」が「正課教育」だけであるかのように受け取られているふしのあることが指摘できる。もっとはっきり言えば，ふしがあるというレベルではなく，実際にいろいろな局面において，「課外活動」よりも「正課教育」が優先されている現実に直面する。例えば，教室を使う場合でもスポーツ施設を借りる場合でも，課外よりも正課が優先される。極端な事例かも知れないが，卒業式のあとの謝恩会で配布するためにメディア施設でゼミ活動を記録したビデオを整理していた教員がゼミコンパの場面を編集していたところ，たまたま居合わせた担当職員から，コンパは課外の活動なのでここの施設を使うことはできないと言われて唖然としたという話を当の本人から聞いたことがあるが，教員の立場からは，ゼミのコンパはけっして課外ではないという意識を有しているが，この職員にとっての課外活動は，正課教育よりも重要性が乏しいというレベルにとどまらず，大学教育の範疇外なのであろう[1]。また，同志社大学では伝統的に水曜日の2

1　本稿における事例の多くは，2004–06 年度に私が同志社大学学生部長もしくは同学生支援センター長↗

講時に「チャペルアワー」もしくは「アッセンブリーアワー」の時間を設けて，奨励や講演を主催してきているが，近年とみに学生の出席者の減少が目立っている。それは，この時間帯に正課講義が行われていることとかなり深い関係を有している。講義を欠席して奨励を聞く，という行動パターンは学生の DNA からいつの間にか姿を消してしまっているのである。このように，このところ「課外」は「正課」に，「活動」は「教育」に，それぞれ勝ち目がないようなのである。したがって，本稿においては「正課外教育」という名称を用いて，大学における課外活動（＝正課外教育）の重要性をことさらに強調しているのである。

第二には，「教育」には「教え育てること。人を教えて知能をつけること[2]」という意味があることから，大学側が学生に対して能動的に働きかけるものであるのに対して，「課外活動」は「学校の正規の教科学習以外の活動[3]」すなわち学生側の自発性に基づいた自主的活動全般を意味していることが指摘できる。本稿においては大学における人材教育について論じようとしているのであるから，当然，課外「活動」ではなく正課外「教育」という言葉を用いることとなる。これによって，「正課」と「正課外」によって構成されている大学教育全体のうちの「正課」教育以外のあらゆる面を対象にして論じようとしているのである。

Ⅱ　正課外教育の意義と重要性

大学における正課外教育の重要性が議論されるのは今に始まったことではない。およそ 40 年前には，現在でも正課教育の領域で重要な問題として議論されている一般教育の充実，教育課程の再編成，教授方法の改善等に関する検討の必要性と並んで，学生の人間形成上の効果を期待するために「課程外諸活動」を推進する「厚生補導」の充実の必要性が強調された。しかしながら，ここでは，厚生補導が正課教育の「補充的機能」にすぎないこと，あるいは「付帯的活動」としか見なされていないこともまた同時に指摘されていたのである[4]。

このように「補充的」であるとか「付帯的」であると考えられたのは，おそらく，そのように見なしても，その当時の学生が自主的に活動していた実態があったからであろう。その学生の自主活動の中の学生自治活動が，やがて，きわめて先鋭的な政治活動化

↘　としてキャンパス内で実際に処理に当たった事柄やキャンパス内外で見聞きしたものを中心としている。また本稿の内容は，社団法人日本私立大学連盟学生委員会正課外教育研究分科会（主査　百合野正博）『大学生が人間（ひと）としてせいちょうするために』（2007 年）の一部を構成している。

2　新村出編『広辞苑』（第五版），岩波書店，1998 年。

3　同書。

4　中央教育審議会答申「大学教育の改善について」1963 年。

し，多くの大学が学生運動＝学園紛争の嵐に見舞われたことは周知のとおりである[5]。

それが収束するとともに，その反動として学生自治活動の低迷期を迎え始めていたおよそ 20 年前になると，大学における自主的課外活動は，「正課だけでは十分に達成できない学生の多様な人間的諸要求とその発達を実現しようとする活動」であると明確に認識されるようになった。同時に，「助育」は「大学教育自体が目的とする個性的で豊かな人間形成に大きく寄与し得る」ものと指摘されるようになっていた。しかしながら，学園紛争の混乱の後遺症が尾を引く中，わが国の実態に即した助育論は模索中であるとされたのである[6]。

さらに，バブルが崩壊して失われた 10 年が経過しようとしていた頃に書かれたいわゆる『廣中レポート』は，その半世紀近く前の 1958 年の学徒厚生審議会答申を振返り，それが知的・専門技術的な教授研究を行う正課教育と並ぶものとして正課外教育の役割の重要性を強調していたにも係わらず，40 年以上もの歳月の中でこの点に関する大学の取組みが遅れてきたことを指摘したうえで，今後の大学のあり方を見通す視点の転換が必要であるとして二つの重要なポイントを指摘した。一つは教員中心の大学から学生中心の大学への視点の転換であり，もう一つは正課外教育の積極的なとらえ直しである。前者については，大学教員の関心を研究一辺倒から学生の教育・指導に振替えることを求めた。さらに，後者については，正課外教育が正課教育の補完ではないことをはっきりと認識したうえで，そのあり方を積極的に見直すことを求めたのである[7]。

学生運動という言葉はとっくの昔に死語に成り果てた。レジャーランド化したと揶揄された大学キャンパスには「授業に出席して，よく勉強する」学生が戻ってきている。女子大生は，国を滅ぼす[8]どころか，多くの卒業式で「首席は女子」が定着しているのである。大学に混乱をもたらした（と思われた）過去の遺物は整理されて，キャンパスに「秩序」という二文字が堂々とそびえ立つようになったのである。しかしその一方で，学生のモチベーションの変化と基礎能力低下の問題が大学を脅かすようになってきている。このような現実に直面している今，改めて正課外教育の重要性について検討すべき時期が来ていると考えるのである。

だからと言って，大学における教育の中心が正課にあることを否定するものではない。ただ，正課教育には限界が存在しているのである。すなわち，それが一定のカリキ

5　同志社大学における学生自治活動の歴史については，同志社大学学友会残務整理委員会編『「同志社の栞」資料集　学友会の《主張》1957～2004』同委員会発行，2005 年，に詳しい。

6　日本私立大学連盟『現代学生部論－変革期における模索と提言－』第一法規出版，1989 年。

7　文部省「大学における学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った大学づくりを目指して－」2000 年。

8　女子大生亡国論は，例えば早稲田大学教授の暉峻康隆が「女子学生世にはばかる」（『中央公論』第 46 巻第 3 号，1962 年）を，慶応義塾大学教授の池田彌三郎が「大学女媧論」（『中央公論』第 46 巻第 4 号，1962 年）をそれぞれ寄稿した頃からマスコミを賑わせるようになった。

ュラムに沿って「提供される」ものである限りは，それがたとえ相当に自由度の高い内容のものであったとしても，正課教育を受けている学生は教育を「与えられる」立場に置かれている。また，自主的に科目を選択して登録し，実際に講義を聴き学修する主体が学生であったとしても，そして，講義に出席するかどうかの判断は学生の側に委ねられているとしても，正課教育に関する学生の行動の全体は一定のルールのもとで単位を取得しないと学位を得ることができないというカリキュラムの「大枠」によって制約を受けているのである。このように，正課には「学生が受け身」であるということと，その「限界」が線引きされているという問題点がある。

ところが本来は，大学という空間＝コミュニティにおいて，学生はそのような「受け身の存在」ではないはずであろう。学生は，自立して，大学を「能動的」にそして「自由」に動き回ることのできるキャンパスの主役にほかならないのである。その証拠に，高等学校までの学校と大学を比べてみよう。字面を見ると一目瞭然である。小学校から高等学校までの学校には「校」の字がついているのに対して，大学には「校」の字がついていない。もちろん，「大学校」も少しは存在しているが，学校教育法に基づく「大学」は「大学校」ではない。

この点について，国立大学の教官でもあった作家の森博嗣は，大学に「校」の字がついていないのは大学が「教えてもらう」あるいは「教育を受ける」場ではないからだと喝破している。すなわち，学ぶための知識と方法は高等学校までの教育で身につけられる。大学では，その知識と方法を使って学生の側が自発的に学ぶこととなる。大学の教育が講義室で行われる授業にあるというのは誤りであって，自力で学ぶ方法を知っている大学生という学び手の主体性の上になり立っているのが本来の大学の教育システムだと明確に指摘しているのである[9]。

また，漢和辞典を引けば，「校」の字には「物事を教え，ならう所」という説明に加えて，「かせ」という意味が載っている。すなわち，われわれ自身が経験したように，小学校から高等学校までは何かと窮屈な思いをさせられるけれども，「校」のついていない「大学」はそうではない。大学において，学生の自由はまったく束縛されないのである。

このように極めて自由な環境におかれている大学生は，キャンパスライフで経験する様々な人間的触れ合いを通じて，一人ひとりの差違を認識するとともに，コミュニケーション能力を高めつつ，批判的思考力，問題解決能力，意思決定能力などを涵養することができるはずなのである。具体的には，リスクを背負って自己決定し遂行するプロセスを自己の成長に還元することから自主性が涵養され，異なる意見や立場を相互に交換することをとおして他者理解が促進され，先輩や後輩（場合によっては OB や OG）と

9　森博嗣『100 人の森博嗣』メディアファクトリー，2005 年。

のつながりからは継続性を最大限に利用した人間的成長が期待できるのである。[10]

ところで，このような大学生の人間的成長は正課教育によって獲得されるものであろうか。もちろん，そのような場合もあるかも知れない。最近は正課科目の種類も豊富になり，座学以外の様々な人間的触れ合いを包含する科目も設定されるようになっているからである。[11]しかしながら，教室の使用に時間的な制限があることに端的に現れているように正課教育の範疇には一定の制約がある。もちろん，例えばサブゼミでの議論が夜を徹して行われ得ることに象徴されるように，正課教育およびそれに付随する様々な学修が必ずしも時間割に制約されるものではなく，各々の学生の自主性に基づいて行われ得るものではあるのは事実だとしても，正課の講義 1 講時に始まって最終講時には終るのである。

それに対して，正課外の諸活動には，時間的なあるいは物理的な制約が厳しく設定されているわけではない。というか，ほとんど何の制約もない。クラブ活動が終っても，同じメンバーが一緒に食事をし，呑みに出て，場所を変えながら議論を戦わせる中に，クラブ活動の中身と密接な関連を持つ空間を共有することは可能になる。しかも，その空間では，一方向に知識が流れているのではなく，双方向のコミュニケーションを介在させて，ともに学びともに成長しているのである。

さらに，これらは，伝統的な枠組みを超えてさらに拡がる可能性を秘めている。例えば，地域連携が推進されれば，地域社会との接点から生まれる新たなコラボレーション，すなわち学生の側からのスキルの提供と地域からのサポートの獲得が期待できるであろうし，悪名高き就職活動の早期化ですら，早々とそれを終えた 4 年生が課外活動に回帰することにより，就活をとおした振り返りが後輩に還元されることが期待できるのである。[12]そして，このプロセスで，若い学生は上級生から校歌や応援歌を教わり，大学スポーツの応援につれて行かれ，とくに伝統的な試合の場合には前夜祭で相手校を罵倒することも教えられる。私立大学の場合には，アルコールとともに建学の精神が熱く語られ，もしも近くにあれば，創立者の墓参をすることや，ゆかりの地を巡礼することにも発展し得るのである。いやがうえにも愛校心が高められるであろう。[13]

10　2004 年度文部科学省事業「特色ある大学教育支援プログラム（いわゆる「特色 GP」）」に採択された同志社大学の申請テーマ「大学コミュニティーの創造－コミュニケーション・デバイドの克服－」には，昨今の大学はこのような人間的成長に密接に係わるキャンパスライフを提供することができているであろうか，という問題意識のもとに，旧来の学生部を新しいミッションを持った「学生支援センター」に衣替えすることによって，新たな大学コミュニティーを創造することができるはずであるという強い信念のもとに様々な工夫が盛り込まれていた。

11　そのような正課科目の代表として，同志社大学のプロジェクト科目がある。詳しくは，http : //www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/pbl/ を参照のこと。また，本学には，正課外教育として，京田辺キャンパスのローム記念館を活動の拠点とした「ローム記念館プロジェクト」も存在している。詳しくは，http : //rohm.drm.doshisha.ac.jp/doc/project/list/2009.html を参照のこと。

12　この領域の同志社大学の取り組みについては，http : //www.s–cube.info/ を参照のこと。

13　拙稿「同志社大学逍遥か」『チャペルアワー案内』第 146 号，1999 年。（http : //www.doshisha.ac.jp/academics/institute/christ/chapelhour/back.php で読むことができる。）

このように，大学という空間＝コミュニティー＝大学のキャンパスは，学生がいわゆる「人間力」をつけるという意味での様々な成長の機会を提供しているのである。その全体を概観すれば，大学は，一昔前に言われていた「遊園地」ではなく，まさに「ワンダーランド」だと言えよう。そして，この大学というワンダーランド全体が「正課」と「正課外」によって構成されていると考えれば，システマティックなまとまりを有しているもののその大枠に制約のある正課の領域に比して，正課外は，システマティックなまとまりを有さないものの，そのボーダーは果てしない。正課外全体のイメージは想像をはるかに超えた大きさだと言えるであろう。

そして，大学が社会に対して送り出すそれぞれの卒業生が単に高度な知識を身につけるだけでなく，その知識を十分に活用するだけの人間的な成長を遂げていなければならないとすれば，そのような人間的成長の機会を提供する正課外の諸活動は極めて重要な意味を持つことになると考えられるのである[14]。

Ⅲ　学生の多様化と現実とのギャップ

『廣中レポート』は，その中で「極めて多様な学生」が大学に進学するようになっている現実を直視することと，それに対応する必要性について再三再四言及している。そして，その「極めて多様な学生」には二種類の評価が与えられている。

その一つは，どちらかというと前向きの評価であって，わが国の社会が高度化・複雑化・専門化・国際化をますます進める状況のもと，進学率の上昇によって資質や能力，知識，興味・関心などの面で多様な学生を受け入れる状況が生まれていることを大学ははっきりと認識したうえで，それに対応するために，学生の視点に近い位置に立って学生に対する教育・指導の充実やサービスの向上に努めなければならない，というのである。そして，そのような多様な学生の選択肢は，わが国のグローバル化の進展に伴って国際的な大学間競争をも生み出すであろうという将来展望も示されていた。

それに対して，大学のユニバーサル化がもたらしているどちらかというと否定的側面についても触れられている。少子化と進学率の上昇は大学で学ぶものとしての基礎能力不足の問題に加えて，大学生としての生活を送ることに関するモチベーションの問題を

14　ところで，この果てしない拡がりを有している正課外の諸活動に対して，大学の側は積極的に何らかの係わりを持つべきなのであろうか。それとも，一昔前のように，それは学生の自主性に委ねて，ただ見守るだけで良いのであろうか。あるいは，見守るだけで良いのではなく，見守ることの方が良いのであろうか。この点については，正課外教育が正課教育の補完ではないことをはっきりと認識し，正課教育に対する取組みと同レベルの注意を払うべきだとの考え方に立てば，『廣中レポート』の指摘を待つまでもなく，教員中心の大学から学生中心の大学に視点を転換することが求められる。そうであるならば，正課外教育の重要性が浮かび上がってくるとともに，正課外教育に対する支援のあり方を積極的に見直すことも求められてくるであろう。

発生させているというのである。また，社会の価値観の多様化や就業構造の変化は，将来の選択肢の多様化を生み出す一方で，選択肢が多すぎて絞りきれない学生を生み出している。そのため，将来の職業や具体的な学修内容について明確な自覚を持たないまま「自分探し」をするために進学する学生や，場合によっては心に悩みを持つ学生が増えているという，大学関係者のおそらく誰もがとくに近年深刻な問題ととらえ始めているであろうと思われる実態の指摘である。

たしかに，極めて多様な学生が大学に進学するようになっているのは紛れもない事実である。しかしその一方で，多様な学生・個性的な学生は昔から存在していたという指摘もある。一昔前，キャンパスには学生があふれ返り，大学周辺の街角や喫茶店には学生がたむろし，学生街では市民以上の市民権を大学生が得ていた。大学生が TV の素人番組の常連となってタレントも顔負けの人気を博していた時期もあった。そのような一昔前の個性豊かな学生と昨今の多様な学生を区別することなく同じ言葉でとらえていいのであろうか。言葉は同じでも中身は全く異なっている。その中身について具体的に語られることは稀だとしても，これは，大学の現場で学生と接している教職員がひしひしと感じている現実ではないだろうか。

そして，その状況に拍車をかける，あるいは，決定的一撃を加えるおそれのある「大学全入時代」はすでに始まっているのである。

たしかに，筆者自身の経験でも，この 40 年間の学生気質の変遷は「劇的」と表現できる。私は，講演[15]などで，その間の学生気質の変遷をしばしば，「角帽，ゲバ棒，遊ぼう，多忙」と韻を踏んで説明しているが，大学生が学生服を着て「角帽」をかぶっていた私より少し上の世代は旧制の香り，アメリカナイズされたインテリの雰囲気を強く残していた。

われわれ「ゲバ棒」世代の学生は，正課には見向きもしないで正課外の大学生活を謳歌した。そもそも，正課教育は全学バリケード封鎖によって一時期キャンパスから姿を消してしまっていたではないか。受験生ブルースに象徴される受験戦争を終えたらバラ色の大学生活が待っていると期待に胸を膨らませながら入学した大学では，誰に教えられるまでもなく，古本屋で安い哲学書を買い込み，クラブ活動で知りあった友人と喫茶店や安下宿で議論をするものだと誰もが思っていた。それにしても，今から振り返ると，「受験戦争」とは何とオーバーな言葉だろう。高校の必修科目を履修しないで受験勉強をするなどというせこいことは誰も考えていなかった。高校生活は十分に楽しみながら，最後の学生生活である大学に進学するための一つの通過儀礼をこのような言葉を

15　例えば，平成 20 年度全国学生指導研修会（主催：独立法人日本学生支援機構，協力：文部科学省）における私の講演内容については，http : //www.jasso.go.jp/gakusei_plan/documents/20 zenkoku_yurino.pdf を参照のこと。

使って揶揄していたのではないかとすら思われるのである。

そして，講義に出席するかどうかは，その講義が出席に値するかどうかを基準に，学生がイニシアチブをとって決定していた。学生は講義内容を評価し，批判した。さらに，講義というものはそれほど期待をするものではないとすら思っていた学生が多かったのである。

これにはそれなりの根拠があった。それは授業科目の単位の重さの違いについてである。体育実技が 1 単位，語学が 2 単位であるのに対して専門科目が 4 単位になっているのには重要な意味があると聞かされた。すなわち，体育実技は予習や復習をしなくても 1 年間出席しさえすれば 1 単位が貰えるが，語学は講義時間と同じ長さの予習をした上で出席することが必要なので 2 単位。それに対して，専門科目は講義時間の 3 倍の「自学自習」が必要なので 4 単位だというのである。このことを知れば，教室での講義の重要度はおのずと軽くなる。その科目の単位の四分の一にすぎないからである[16]。逆に，講義時間の 3 倍の時間を自学自習に充てるためには，おちおちアルバイトなどに時間を浪費していられないし，場合によってはそう簡単にキャンパスから出て行くこともできない[17]。大学というワンダーランドに住みついて，正課と正課外のないまぜになった教育環境にどっぷりと浸り，全体としての制限時間はあるものの，個別の 1 日 1 日にはまったく制限時間のないキャンパスライフを送ることが必須となるのである。

やがて大学がレジャーランド化したと揶揄されるようになった「遊ぼう」世代を経て「多忙」世代になると，この専門科目が 4 単位，という点にほとんど注意が払われないようになってしまう。注意が払われなくなると，講義時間の 3 倍の自学自習のための時間がいつの間にか姿を消してしまい，講義こそが大学での教育そのものと考えられるようになった。そのため，講義はさぼるものではなくて出席するものだということになり，その出席はやがて必須と見なされるようにもなったのである。ここまで来ると，いつの間にか「講義に出席しさえすれば十分」という誤った考え方が定着するようにさえなったのである。

講義に出席しさえすれば十分ということは，講義時間の 3 倍の自学自習時間が不要になることを意味している。そうなると，時間は余ってくることとなる。そうなれば，クラブやサークルの課外活動に没頭する学生が増加し，課外活動全般が活性化する，と連想されそうであるが，実はそうではないことが問題をややこしくしているのである。

16　このことについては，一昔前の新入生には大学における学修の意味を理解させるためにまず説明した重要な事柄であるにも係わらず，半期制の採用に伴って単位換算が変わったこともあってか，最近はあまり触れなくなっているが，高校での勉強と大学に入ってからの勉強が全く違うものだということを認識させることはきわめて重要なことではないだろうか。

17　イギリスやアメリカの大学がキャンパス内に学寮を整備している理由も，このあたりから想像することができる。

学生は，本来は自学自習の時間であるその余った時間を，アルバイトや資格取得のための専門学校に通うことに使い始めたのである。かくして，講義を受けるために登校し，講義が終るとキャンパスから別の目的地に向かって出て行くという，キャンパスに住み着くのではなく通って来るという学生のパターンが生まれたのである。

このことは同時に，クラブ・サークル活動に関しても新しい傾向を生んだ。お手軽なサークルには名前を連ねるけれども，何かと制約の多そうな体育会や学術系のクラブ，あるいは伝統のあるクラブは敬遠されるようになってしまった。このように，学生の側の正課志向の強まりは，結果として，キャンパスの空洞化を招来することとなったのである。

Ⅳ　正課外教育の分野での大学の支援

前節で述べたような大学の状況に対して，大学はけっして手をこまねいてきたわけではない。それは，大学での教育がけっして正課によってのみ達成されるものではなく，それ以外の様々な刺激や行動を通してひとりの大人になるための，いわゆる「人間力」をつけていくものでなければならないことを大学が認識しているからにほかならない。たしかに，大学生を取り巻く現状は，国際化，情報化の進展に反比例するかのように，一人ひとりの孤立，他人に対する無関心，不寛容が増大しているのは事実である。学生の人間関係は縦横いずれも希薄化し，その結果，他者との触れ合いやそれを通しての葛藤から生まれることの期待される精神的な成熟が困難な状況が生じている。そして，このような状況は，学生個人の問題として看過することはできないのである。なぜならば，個の確立という青年期特有の普遍的な課題をないがしろにしたままで大学の使命を果たすことはけっしてできないからである。

このような現状に対して，大学側は，学生に手を差し伸べる，あるいは，学生の背中をちょっと押してやる程度のことをとおして，キャンパスコミュニティーの希薄化をいくらかでも改善するために，大学間に程度の差はあるものの各大学は様々な試みを実行してきている。

それらは極めて多方面にわたっているが，ここでは五つのカテゴリーに分類しよう。具体的なケースについては，社団法人日本私立大学連盟や独立行政法人日本学生支援機構での委員会，研究会，フォーラムなどで紹介された事例を中心に紹介している。

第一のカテゴリーは，伝統的なクラブ・サークルに対する支援としての「正課外活動支援」である。これまでは，費用の負担や分配面をも含めて学生の自治組織がイニシアチブをとってきた領域であるし，とるべき領域である。もちろん，現在でもそのことを堅持している大学も存在している。しかし，他方で，学生自治組織の崩壊，自分たちの

クラブ・サークルの面倒を見るだけで手いっぱいの学生たちの増加，就職活動の早期化に伴うリーダー層の若年化など，クラブ・サークル活動を取り巻く環境はけっして明るくないのが現実である[18]。このカテゴリーについては，学生の自治活動の動向とも関連させて，稿を改めて論じたい。

第二のカテゴリーは，クラブ・サークルに所属しない個々の学生に対して，そのことがもたらすデメリットを少しでも埋め合わせることを期待して実施されている，どちらかというと「教育」的性格を有するプログラムである。伝統的な第一のカテゴリーと対比するために，これを「アイデンティティー確立支援のための正課外教育プログラム」と呼ぼう。このカテゴリーは，各大学の具体的な取り組みの分類から，次の四つに細分化できる。このカテゴリーが，本稿の論点に最も近いカテゴリーである。

1）建学の精神の理解・大学への帰属意識を向上させるプログラム
2）学生個人への啓発支援，発達支援に資するプログラム
3）大学という空間の構築に資するプログラム
4）体験や幅広い教養を身につける機会を提供するプログラム

なお，この領域は，けっして私立大学固有の領域ではなく，国公立大学においても等しく重要だと考えられるが，とくに建学の精神の理解を促すことをとおして大学への帰属意識を向上させるプログラムや，一人ひとりの学生の啓発支援や発達支援に資するプログラムは，各私立大学の個性の生かせる領域であり，実際に多くの私立大学で個性的で多様なプログラムが提供されている。

第三のカテゴリーはボランティア活動支援および障害学生支援である。自主的な活動であれ，教育プログラムであれ，学生はこうしたボランティア活動に取り組むことよって，社会性や道徳性といった「人間としての意識」を高めている。今日においては，学生に高い倫理性をもたせることもまた社会から求められている教育の一つとなっているので，このカテゴリーの重要性は高まりつつある。同志社大学のこの領域に関する取組みについては，2005 年度の日本特殊教育学会において研究発表を行った[19]。このカテゴリーについては，とくに同志社大学で力を入れるとともにその成果も著しい領域なの

18　先に挙げた『「同志社の栞」資料集　学友会の《主張》1957～2004』は編者の「同志社大学学友会残務整理委員会」という名称が示しているように，同志社大学の学友会の解散を受けて編まれたものである。編集後記に次の文章がある。「同志社大学学友会とは，全員加盟制の各学部自治会と学術系文科系体育系のすべてのサークル団体を統合した学生自治組織であり，大学内制度としての形式を備えている。しかしながら，組織を現実的に維持し担っていくことは，学生の活動の最終的な拠り所としての〈理念の帰属性〉を自ら創出していくことをおいては成り立たない。自らの帰属性の創出という困難さは，ここ数年間で瞬く間に市民社会の平準化現象の侵食の中でいくところまで追いつめられ，今回の学友会の解散という事態となった。学友会の中心に携わる学生自身にとりたてて運動の〈動機〉がないのに，責任者として何らかの学生の活動を保障しなければならないという（これはなかなかつらいことだと思うが）学生の二極化した倒錯した状況を生み出すに至った。もはや学生は，昔のスローガンのごとく「共に闘う」存在ではないのだろう。」学生自身によって書かれた文章でないことが読み取れる。

19　「聴覚障害者高等教育支援ネットワークの構築に向けて」日本特殊教育学会，2005 年 9 月 23 日。

で，稿を改めて論じたい。

第四のカテゴリーはインターンシップである。各大学のインターンシップの取り組みは始まったばかりの印象が強いが，企業がインターンシップ生に求めている要件が特別な専門的知識や技能と言うよりは基本的な社会的マナーであると言われていることから，この領域も基本的な人間教育の色彩が強い。しかしながら，このカテゴリーについては，正課教育との関連で支援が実施されている印象を受ける。とくに昨今のように就職活動にきわめて厳しい状況が存在している現状にあっては学生の関心はきわめて高く，自発的な活動が目につく。

第五のカテゴリーは地域交流を意図した取組みである。大学や大学生が持つリソースの還元や地域と大学が交流することによる世代を超えた学びの場の創出からもたらされる，社会で生きるための力や倫理観，コミュニケーション力の育成，文化の継承といった活動への大学の貢献が期待されている。同志社大学のこの領域の活動については，京田辺キャンパスにおいては「けいはんな知的特区活性化デザインの提案」（2005 年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」採択事業[20]），今出川キャンパスにおいては「地域コミュニティによる学生支援方策　～京町家を拠点にした異世代協同プロジェクト～」（2007 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」採択事業[21]）がある。このカテゴリーについては，たんなる「地域交流」のレベルを超えた効果の期待できる分野だと考えるので，稿を改めて論じたい。

Ⅴ　アイデンティティー確立支援のための正課外教育プログラム

前節で述べた五つのカテゴリーのうち，本稿のテーマとの関連で最も重要視したいカテゴリーは第二のカテゴリーの「アイデンティティー確立支援のための正課外教育プログラム」である。

大学が大衆化し，社会が多様化していく中で，様々な学生が入学してくることにより，従来よりも「個のケア（＝支援）」に対する重要度が高まってきているという現実にわれわれが直面するようになって久しい。20 年ほど前までであれば，学生は各自の成長過程の中で，地域社会や家庭，クラブ・サークルなどでの他者との関わりを通して自らの生き方を見つめ直すことを学んできたと言えるが，いつの間にそうなってしまったのか判然としないまま[22]，大学が気付いたときには，そのような学生は少数になってし

20　詳しくは，http : //chiiki.doshisha.ac.jp/index.html を参照のこと。

21　詳しくは，http : //www.doshisha.ac.jp/academics/activity/shakai/ を参照のこと。

22　学生の資質が変化したことに加えて，以前は町中にあった大学が，半ば強制的に郊外に移転させられたことと関連があるかも知れない。学生一人当たりの校地面積は広くなったものの，以前であれば学生の日常生活の中でキャンパスライフと既存の「街」との接点が存在していたのに対して，郊外に移転し↗

まっていた。このような状況の変化に対応するため，最近，各大学は，大学が主催する正課外教育プログラムの分野で，学生の自己啓発の機会を提供する極めて多種多様なプログラムを積極的に実施するようになってきた。

すなわち，大学生活の 4 年間は「自分探し」の 4 年間とも言えるが，以前は学生個人個人が自主的に行っていたその活動に対して，大学は「自分探し」をする学生に対する支援を積極的に行うようになってきているのである。

前節での細分化に基づいて，各大学で実施されている様々な正課外教育プログラムをいくつか例示的に示すが，全国の大学で実施されているさらなる事例については，文部科学省のホームページの「GP 選定事例紹介」に詳しい[23]。

1　建学の精神の理解・大学への帰属意識を向上させるプログラム

(1) 建学の精神を伝える取り組み

私立大学においては，各大学独自の建学の精神をどのように学生にわかりやすく伝えていくかということが問われ続けている。これに対する取組みは，正課における取組みと正課外における取組みに大別される。

正課教育においても，昨今「自校教育」に関する科目がさかんに展開されるようになり，大学設立からの歴史を説明していく中で建学の精神や大学の特色を学生に伝える取り組みが増えてきている。同志社大学においては，「建学の精神とキリスト教」「キリスト教と人間」「キリスト教とは何か」「アーモスト大学とリベラルアーツ教育」などのいわゆる「同志社科目」を開講している[24]。

正課外教育プログラムの分野においても，具体的な体験を通して，建学の精神に触れる取り組みを行っている大学がある。

複数の大学が建学の精神を見つめ直すとともに，コミュニティー形成を促進させるプログラムを実践している。キリスト教精神に基づく教育を建学の精神に謳っている立教大学では，夏季休業期間中に 10 日間，協定校である韓国聖公会大学の学生とともに寝食をともにしながら，言葉や国境，歴史の壁を超えてお互いが置かれている状況の違いなどを理解し合う「日韓キャンプ」を実施している。さらに，岩手県奥中山「小さき群れの里」で生活する知的障害者の人たちとともに 8 日間，道路作りや開墾などのワークを中心とした生活を過ごしながら，障害者，健常者といった垣根のない人と人とのふれあいの場から学生が自らの生き方を見つめ直す「奥中山ワークキャンプ」などを実施している。

↘ た大学におけるキャンパスライフは閉じられたエリアの中にあって，他者との接点も限定されたものになってしまった。

23　http : //www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gp/007.htm を参照のこと。

24　http : //cgle.doshisha.ac.jp/callist/index.html＃を参照のこと。

（2）創立者に関わる取り組み

創立者のルーツを訪ね，足跡を辿りながら，創立者の想いや建学の精神を見つめ直すとともにコミュニティ形成を促進させるプログラムもいろいろな大学で実施されている。同志社大学では，校祖新島襄ゆかりの地を訪ねる「函館キャンプ」や「熊本キャンプ」が毎年実施されている。また，2005 年度には新島襄が帰国に際して大学設立のための寄付を募るスピーチをしたバーモント州ラットランドのグレース教会からリベラルアーツを学んだマサチューセッツ州アーモストのアーモスト大学まで踏破する「新島襄メモリアル・ウォーク」を実施した[25]。

（3）大学への帰属意識を向上させる取り組み

学生の大学への帰属意識が希薄化していく中で，学生たちが入学した大学への帰属意識を高める方策が正課外教育プログラムの中で取り組まれている。

たとえば，学生スポーツの応援を積極的に活用している大学がある。校歌を知らない学生が増加していることへの対応策として，明治大学の「東京六大学野球観戦ツアー」や早稲田大学の「東京六大学野球の早慶戦の応援」は，スポーツの応援を正課外教育の一環として利用している。明治大学では他にも体育会ラグビー部との交流会や箱根駅伝応援などのプログラムを実施している。いずれも母校への帰属意識を高め，「この大学に入って良かった」という意識を持たせる工夫の一つの取り組みとのことである。筆者が学生の頃には，同志社大学においても，関西六大学リーグ（当時）の応援に行くと体育実技の出席点が貰えた。

卒業生組織との連携のもとに，立教大学では 10 月末に行われる卒業生対象のホームカミングデーに，学生団体のリレーコンサートを実施したり，キッズプレイランド（託児所）などの運営を学生団体に任せるなどの取り組みを行っているが，学生が卒業生に触れる貴重な機会となっているとともに卒業生からは大変好評を博しているとの評価である。

2　学生個人への啓発支援，発達支援に資するプログラム

（1）大学における学生個人への啓発支援・発達支援の事例

①導入教育的プログラム

昨今，大学生活を送る上での基本的なスチューデント・スキルを身につけずに入学して来る新入生が多く，正課教育に関わる事柄だけでなく，学生生活全般に関わるリテラシー教育，導入教育の充実が求められている。そうした状況を受けて，新入生を対象に入学式前後に新入生を対象としたキャンプを実施している大学が多くなっている。内容としてはガイダンス的なものから，仲間作り，これから始まる学生生活のモチベーショ

25　http : //www.doshisha.ac.jp/students/support2/kaprog/memorial/ を参照のこと。

ンを高めるものまで様々なタイプがある。最近の傾向としては，上級生を学生アドバイザーとして積極的に活用することで多くの成果をあげている。

立教大学では「新入生キャンプ in 清里」で 2 泊 3 日，100 名の新入生が 20 名の上級生，教職員らとともに過ごす中から，新しく始まる学生生活への不安を解消し，充実した学生生活を過ごすためのきっかけを作る機会として実施している。また，同志社大学は「フレッシャーズキャンプ」を 4 月に 2 回にわたり実施している。それぞれ新入生 100 名ずつの規模である。小規模大学や，学部単位で実施している事例は数多くあるが，大規模大学でも事例が増加している。

ただ，この導入教育面での重要性の認識はますます高まっており，むしろ正課面で手厚いケアを行う大学も多くなっている。同志社大学商学部では，「アカデミック・リテラシー」と「ビジネス・トピックス」の 2 科目を設置して，大規模学部における組織的教育改善の一環として効果的な導入教育に取り組んでいる。この取り組みは「学生と教員の『幸せな出会い』を目指す導入教育」として 2007 年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された[26]。

(2) 自己理解や生き方に関するプログラム

青年期は，学生生活の中で「自分自身」や「生き方」について考え，悩む時期である。しかし，これまで「自分」や「生き方」などについて真剣に考える機会がほとんどなかった学生たちの中でその作業に戸惑う者は少なくない。そのような学生状況を踏まえ，「自分ってどんな性格？」，「どういう特徴を持っている？」などの問いに対して，具体的な体験を通して学生が気づきや学びが得られるようなプログラムを行っている大学が増えてきている。

同志社大学は「エンパワーメント・プログラム（体験プログラム）」を実施している。「エンパワーメントプログラムは，あなたの心の羅針盤づくりをサポートします」とのキャッチフレーズのもと，3 泊から 4 泊程度の日程で，備前や熊野，沖縄，徳島などの豊かな自然の地で寝食をともにしながら，頭で考えるだけではなく，自分の手で触れたり，身体で感じる中から集中力とパワーの取り戻し，学生生活に生かそうという趣旨で実施している[27]。

(3) 対人コミュニケーション

「対人コミュニケーション能力」を身につけ，「より良い人間関係」についての学ぶことは，学生にとっては必要不可欠な要素であり，大切なテーマである。立教大学では「アサーション（自己表現）・トレーニング」や「クリエイティブ・コミュニケーション」などのプログラムを年間数回開催し，学生が対人コミュニケーションを実践的に学

26　http : //commerce01.doshisha.ac.jp/gp/index.html を参照のこと。
27　http : //www.doshisha.ac.jp/students/support2/kaprog/empower.php を参照のこと。

ぶプログラムを展開している。これらのプログラムを通して，実際に「見たり」，「聞いたり」，「話したり」しながら，学生自らが「体験」することから具体的に学んでいくとともに，仲間・友人作りの機会としても活用している[28]。また，同志社大学では「ヒューマンスキルセミナー」に代表される「S-Cube　セミナー」を実施している。

(4) フィールドワーク

「自分自身」や「生き方」について考える時，自らの置かれている日常から離れ，非日常の世界から学ぶことも重要な体験である。

キャンパスを離れ，様々な社会（現場）で生きている人たちとの出会いを通しながら自分自身の生き方を見つめ直すものであり，「自分探し」のためのプログラムなどとも呼ばれている。

立教大学では，岩手県にある「ホロタイの郷炭の家」で 6 日間共同自炊生活や民泊をしながら林業に関する作業や炭焼きを地元の人に教えていただく夏季フィールドワーク「林業体験－陸前高田の森に学ぶ－」を実施している。地元の方々とは，森での作業の指導の他，様々な場面での交流がある。その土地を愛し，自分の生き方に誇りを持って生活している人々の逞しさやしなやかさに，学生は自らの生き方を問い返す体験をしている。

同志社大学では 2006 年 8 月の 12 日間に「セルフディスカバリー・プログラム in モンゴル」を実施した。学生は遊牧民の集落でゲル生活を行ったり，水汲みや家畜の世話などのボランティア体験を行った。水道や電気もない大自然の中で生命について考え，自分自身の内面を深く見つめ直す機会になったと評価している。

(5) こころとからだ

現代社会のもたらす多忙，ストレス，生活の乱れ，食生活の変化などにより，心身に変調をきたす学生が増えてきている。そこでこうした状況に対応すべく，各大学の学生相談所や学生支援センターを中心に「こころ」と「からだ」のつながりや自分の内面からの声に耳を傾けてみることをねらいにしたプログラムが実施されている。

立教大学や同志社大学では「ボディワーク」や「ヨガ」などのプログラムを実施し，明治大学では「ボイストレーニング」のプログラムを実施している。

(6) スキル

学生生活やクラブ・サークル活動などで活用できるようにと各大学で様々な講習会や研修会が実施されている。同志社大学では「課外体育講習会」と称して，「熱中症」，「山岳」，「水上安全」，「応急処置」などの講習会を実施している。関西大学や立教大学

28　立教大学では，従来，正課外教育プログラムとして実施していたものを正課教育の授業の中でも実施している。上記（2）については『自己理解・他者理解』（半期授業），(3) については『対人コミュニケーション』（夏季休業期間中，4 日間の集中講義形式）という科目を展開している。これらの授業を事務部局である学生部が主催しているところに特徴がある。

では「救急救命法講習会」,「トレーニング講習会」」「栄養学講習会」,「テーピング講習会」を実施している。

(7) リーダー研修会

昨今のクラブ・サークル活動にも社会状況や学生状況が影響を与えている。

一人ひとりの学生の個人化が進み，学年を超えた関係性や卒業生とのつながりが希薄化している中でクラブ・サークルのリーダーが育ちにくい状況が生まれている。

そこで，大学側が意識的にリーダー育成に主眼をおいたプログラムを実施しているところが増えてきている。

同志社大学では，新年度を迎える前に競技力の向上のみではなく，スポーツトレーニング理論を体系的に学んだ上で指導できるリーダー，トレーナーの養成を目的として「スポーツリーダー講習会」実施している。立教大学でも新座キャンパスのクラブ・サークルのリーダーを対象に「リーダー研修会」を実施している。

(8) 人権・ハラスメント

この分野は今やどの大学においても，欠かすことのできない重要な取り組みとなっている。多くの大学では，人権・各種ハラスメントに対する講演会や映画会などが上映され，学生，教職員に向け啓発活動を積極的に行っている。

3　大学という空間（コミュニティ）の構築に資するために

このように，最近，各大学は，一昔前であれば学生自身が自発的に行っていた活動を，学生に対するサービスの一環として提供している。一例を挙げれば，昔の学生は，サークルの活動費を少しでも多くするために映画を自主上映したが，今では大学が映画会を開催している。また，昔の学生は自ら進んで研究室のドアをノックしたが，今では教員がオフィスアワーを設定して学生が訪ねて来やすいようにしている。さらに，少し前まで学長や学生部長との団交を要求した学生たちは，今や学生部長との対話などにはまったく関心を示さない。私自身の経験でも，大学が学費値上げの提案を行っても反対運動を起こすどころか，学生は大学側の用意した説明会＝公聴会にも出席しない。まったく他人事なのである。

いわゆる「他者とのつながりの希薄化」は，あるグループに所属することによってそのグループ内でのコミュニケーションはスムーズに進むものの，他のグループとの間のコミュニケーションがうまく行かず，楽しい仲間うちとの付き合いの一方で，せっかくの成長の機会を逸していくという状況を生み出している。以前ならそこまでしなくても，と考えた大学であったが，やがてほってはおけない状況であると認識するようになり，そのような学生諸君の「自立支援」のために，何らかのインセンティブを与えるプログラムを開発することが必要であると考えられるようになった。各大学がそれぞれ工

夫して多様な啓発支援活動を行うようになってきているのである。

多くの大学が啓発支援活動の入口に「何でも相談」を位置づけている。入学式の当日から，どこに行けば何がある，何を読めば何が分かる，誰に会えば何を教えてもらえる，など，手取り足取り，至れり尽くせり。あたかも義務教育に初めて足を踏み入れるぴかぴかの 1 年生に対応しているかのような錯覚を覚えるほどである。新入生対象のオリエンテーションに加えて，新入生キャンプを場合によっては入学式以前に実施する大学も増加している。その後も，多くの大学で上級生による下級生のアドバイザープログラムの継続的提供が行われている。[29]

これらについては，大学主催の企画に参加して目覚めた学生が，翌年以降，後輩の面倒を見るために再び参加することにより，「学生が学生を指導する」ことによる成長の相乗的効果が期待できるのである。

また，従来は教員と職員が担当すると考えられてきた学内業務に学生を積極的に参加させることにより，大学というコミュニティーを構成しているのは自分たちなのだという自覚と，役割認識の生まれることが期待できる。例えば大学会館のホールを運営する学生アルバイト集団は，一昔前なら個別サークルもしくは学友会が担当していた機能を分担しているにすぎないが，現在では，その部分だけが独立して成立している。まさに，大学という空間における分業形態の一種であろう。

コミュニケーション下手の学生が増加することによって集団的半閉鎖状態が生まれているキャンパスの現状を直視し，それを解消するにはどのようにすれば良いかを考えた結果，各大学は，学生の背中を少し押してやるような啓発支援活動を行い，その成果として，このプロセスに主体的に参加してくれる学生を呼び込み，彼らが彼らに続く学生を指導していく状況を生み出そうよしている。そして，学生の新たなニーズやこれまでの評価に応じてこれらのプログラムを不断に再編成していくことを通して，やがて大学というコミュニティーを自立して支える力が生み出されることが期待されている。その結果，学生が主体となった大学という空間の再生が期待できるのである。

Ⅵ　むすびにかえて

正課外教育の果たしている役割の大きさに気付く学生が必ずしも多くない現況のもと，大学は，課外活動支援，正課外教育プログラムの立案と実施，ボランティア活動や

29　いわゆる「モンスターペアレンツ」（アメリカでは「ヘリコプターペアレンツ」と呼ぶ）の問題は日本の大学ではまだあまり顕在化していないようであるが，アメリカでは深刻な問題となっているので，早晩わが国でも無視することはできなくなるであろう。（国際シンポジュウム「大学コミュニティーの創造－学生参画における学生の成長と発達」「パネルディスカッション」2007 年 12 月 8 日，における発言。）

障害学生支援，インターンシップ支援，地域交流支援などを提供し，ますます多様化しつつある学生が内包している多様化したツボを何とか刺激することによって，キャンパスの活性化を図ろうと様々な工夫を重ねてきている。そして，最近では正課教育と正課外教育の境界線とも言うべき，座学ではない講義をとおして，学生が備えているはずのプロデュース能力を刺激し育てることを期待するような，伝統的な大学教育の範疇から見れば異形とも言える正課科目すらも出始めてきている。まさに，大学自らが「書を捨てよ，町へ出よう」と学生に呼びかけ始めていると言っても過言ではないであろう。

それはなぜなのか。大学という空間は成長のプロセスにある一人の青年が「自ら学ぶこと」をとおして一人の成熟した人間として成長する時空だということを大学自らがはっきりと認識しているからにほかならない。そして，この人間的成長のためには，言い換えれば人間力をつけるためには，大学に入るまでに受けた教育と同じようにただ受け身の姿勢で正課教育を学習するだけでは十分ではなくて，正課外の様々な活動をとおして学生自らが主体的に学んで身につけることが不可欠であることを経験的に熟知しているからである。だからこそ，大学は手をこまねいていないのである。

わが国においては，これまでも正課外教育の重要性についての検討が継続的に繰り返されてきた。そして今，例えば中央教育審議会の「第 3 期大学分科会の当面の検討課題例について[30]」において「学生の課外活動の充実・活性化による『人間力』強化」が謳われるとともに，同じく中央教育審議会の「学士過程教育の現状と課題（重要な論点の例[31]）」において「学生の豊かな人間性をはぐくむ観点から課外活動の充実・活性化の方策についてどう考えるか」と言及される環境が再び生まれているのである。

しかしながら，単に課外活動にのみ焦点を当てるだけでは不十分であろう。人ひとりが人間的成長をするためには，ある目的に向かって最短距離を効率良く進むことだけでは不十分である。肉体のトレーニングとは異なり，それなりの長い時間をかけることが必要なのである。そして，その時間は 4 年といった直線を言うのではない。厚みのある体積としての大学という時空を行きつ戻りつしながら人間的に成熟していくことを意味しているのである。

そのためには，高校までに十分な基礎学力をつけておくことが必須となる。ところがこの高校までに身につけておかなければならない基礎学力が，たんに大学入試を突破するためだけの学力で十分であると考えられているふしがある。高校までの学習で習わなかった領域に関心を示す学生は決して多くない。たとえば，外国語の学習がどのようなことに生きてくるかを知らないために，卒業単位を満たせば一刻も早く外国語の勉強から遠ざかりたいと思っている学生の数は無視できるほどの小ささではない。そしてこの

30　平成 17 年 8 月 25 日，第 52 回大学分科会資料。
31　平成 18 年 12 月 24 日，第 8 回制度部会資料。

ことが，「何でも見てやろう」という気概を持って海外に出て行く学生の少なさにつながっていると思われる。

さらに，大綱化以降軽く扱われてきている「教養科目」の問題も残されている。教養が全身に充満しないままで，専門的知識を身につけたとしても，その専門的知識が十分生かされるとは考えにくい。とくに，高等教育の質保証の面でグローバルな基準が存在している現実のもとでは，この教養教育の軽視を無視することはけっしてできないであろう。

このように，大学における人材育成に必要とされながら現在十分に検討されていない視点は本稿で取り扱ったもの以外にも存在しているが，本稿においては，正課外教育の視点からの検討を行った。

付記

本稿は，文部科学省平成 18–21 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）一般）「産学協同・高大連携による人材育成プログラムの開発－成功の要諦・失敗の本質の解明－」の成果の一部である。